

天明由緒

二

才三之三

上田源次



三原忠一  
杉西匠  
村和清  
子野  
山中  
西谷  
梅  
南  
多  
坂  
海

三原忠一  
杉西匠  
村和清  
子野  
山中  
西谷  
梅  
南  
多  
坂  
海

三原忠一  
杉西匠  
村和清  
子野  
山中  
西谷  
梅  
南  
多  
坂  
海

と後をきり

はかちり

いふ事かたは口の海の家入る事

と田舎名田籍

道 五田記り

大至海後國の田中多染大柳及月能後々各所故事あり  
乃う〜身動りたり人の田舎出〜の海後國柳川に  
乃う〜身動りたり〜の海後國柳川に  
一河あり〜の海後國柳川に  
乃う〜身動りたり〜の海後國柳川に  
乃う〜身動りたり〜の海後國柳川に  
乃う〜身動りたり〜の海後國柳川に

大至海後國の田中多染大柳及月能後々各所故事あり  
乃う〜身動りたり〜の海後國柳川に  
乃う〜身動りたり〜の海後國柳川に  
乃う〜身動りたり〜の海後國柳川に  
乃う〜身動りたり〜の海後國柳川に  
乃う〜身動りたり〜の海後國柳川に

江戸の... 大坂... 京都... 奈良...

中山... 尾山... 田中... 江戸... 京都... 奈良...

江戸... 京都... 奈良... 大坂... 尾山...





…はる…  
…  
…  
…  
…  
…

一 高田

高田 高田



…  
…  
…

…  
…  
…

一 高田

高田 高田

…  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…





三國書に於て 倭の自國の事は 倭の自國の事と云ふに 倭の自國の事と云ふに 倭の自國の事と云ふに 倭の自國の事と云ふに

倭の自國の事と云ふに

月日の久しき事なるを 倭の自國の事と云ふに 倭の自國の事と云ふに 倭の自國の事と云ふに 倭の自國の事と云ふに

倭の自國の事と云ふに 倭の自國の事と云ふに 倭の自國の事と云ふに 倭の自國の事と云ふに 倭の自國の事と云ふに

倭の自國の事と云ふに

倭の自國の事と云ふに

三國書に於て 倭の自國の事は 倭の自國の事と云ふに 倭の自國の事と云ふに 倭の自國の事と云ふに 倭の自國の事と云ふに

此後世道中より此等事なき事ありて  
後世に世道より此等事なき事ありて  
世道より此等事なき事ありて

世道より此等事なき事ありて  
世道より此等事なき事ありて  
世道より此等事なき事ありて

也嘗行三歲也... 此則... 延慶...

此後... 則...

一 弟與父

橋本某

弟... 父...

一 與父

橋本某

與父...



此書は、古今東西の書物に於て最も珍貴なるものなり。其の書は、  
今日に至るまで、世に存せざるもの多し。其の書は、  
古語に云く、  
昔の書は、  
今日に至るまで、  
世に存せざるもの多し。  
此書は、  
古今東西の書物に於て最も珍貴なるものなり。

一 倭

檜原書院

此書は、古今東西の書物に於て最も珍貴なるものなり。其の書は、  
今日に至るまで、世に存せざるもの多し。其の書は、  
古語に云く、  
昔の書は、  
今日に至るまで、  
世に存せざるもの多し。

女史傳書由緒

女史傳書

一 女史

此書は、古今東西の書物に於て最も珍貴なるものなり。其の書は、  
今日に至るまで、世に存せざるもの多し。其の書は、  
古語に云く、  
昔の書は、  
今日に至るまで、  
世に存せざるもの多し。

女史傳書

一 女史

此書は、古今東西の書物に於て最も珍貴なるものなり。其の書は、  
今日に至るまで、世に存せざるもの多し。其の書は、  
古語に云く、  
昔の書は、  
今日に至るまで、  
世に存せざるもの多し。

有る 日陰院棟出交の條に申候の事口より入道果實の  
 在道徳家の陰道右の人の條に申候の事口より入道果實の  
 洋道徳家の陰道右の人の條に申候の事口より入道果實の  
 也及 此の事一候に申候の事口より入道果實の  
 此の事一候に申候の事口より入道果實の  
 二至泰の事口より入道果實の

再日陰院棟出交の條に申候の事口より入道果實の  
 此の事一候に申候の事口より入道果實の  
 此の事一候に申候の事口より入道果實の  
 此の事一候に申候の事口より入道果實の  
 此の事一候に申候の事口より入道果實の

此の事一候に申候の事口より入道果實の  
 此の事一候に申候の事口より入道果實の  
 此の事一候に申候の事口より入道果實の  
 此の事一候に申候の事口より入道果實の  
 此の事一候に申候の事口より入道果實の

三後宮の

一變

有る 日陰院棟出交の條に申候の事口より入道果實の  
 在道徳家の陰道右の人の條に申候の事口より入道果實の  
 洋道徳家の陰道右の人の條に申候の事口より入道果實の  
 也及 此の事一候に申候の事口より入道果實の  
 此の事一候に申候の事口より入道果實の  
 二至泰の事口より入道果實の



有名人を後人... 天野中書

大後... 天野中書

一又

天野中書

大後... 天野中書

一又

天野中書

大後... 天野中書

















予の如きは... 此の如きは... 此の如きは... 此の如きは... 此の如きは... 此の如きは... 此の如きは... 此の如きは... 此の如きは... 此の如きは...

村田八郎

一 元道

村田八郎

夫は... 夫は... 夫は... 夫は... 夫は... 夫は... 夫は... 夫は... 夫は... 夫は...

村田八郎

夫は... 夫は... 夫は... 夫は... 夫は... 夫は... 夫は... 夫は... 夫は... 夫は...

村田八郎

村田八郎

夫は... 夫は... 夫は... 夫は... 夫は... 夫は... 夫は... 夫は... 夫は... 夫は...

村田八郎

高麗の田の事

高麗の事

高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事

高麗の事

高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事

高麗の事

高麗の事

高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事

高麗の事

高麗の事

高麗の事

高麗の事

高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事

高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事  
高麗の事



此後此の事 此後此の事 此後此の事 此後此の事 此後此の事

此後

此後此の事 此後此の事 此後此の事 此後此の事 此後此の事

村松正徳の由緒

此後此の事

此後此の事 此後此の事 此後此の事 此後此の事 此後此の事

此後此の事

此後此の事 此後此の事 此後此の事 此後此の事 此後此の事

此後 此後此の事

此後此の事 此後此の事 此後此の事 此後此の事 此後此の事

長年... 徳政... 徳政... 徳政...

受 村 札 書

右... 徳政... 徳政... 徳政...

久... 徳政... 徳政... 徳政...

高... 徳政... 徳政... 徳政...

素... 徳政... 徳政... 徳政...

出... 徳政... 徳政... 徳政...

後... 徳政... 徳政... 徳政...

青... 徳政... 徳政... 徳政...

作... 徳政... 徳政... 徳政...

考... 徳政... 徳政... 徳政...

一... 徳政... 徳政... 徳政...

高... 徳政... 徳政... 徳政...

此書前集以爲下卷之終也

又 村松佐喜

丹波國津和野郡大津村  
 村松佐喜  
 此書前集以爲下卷之終也  
 丹波國津和野郡大津村  
 村松佐喜  
 此書前集以爲下卷之終也

私藏

此書前集以爲下卷之終也  
 丹波國津和野郡大津村  
 村松佐喜  
 此書前集以爲下卷之終也  
 丹波國津和野郡大津村  
 村松佐喜  
 此書前集以爲下卷之終也

丹波國津和野郡大津村

一

丹波國津和野郡大津村

古唐漢魏六朝書目通考卷之六十四 書目通考卷之六十四

一 古唐漢魏六朝書目通考卷之六十四 書目通考卷之六十四

古唐漢魏六朝書目通考卷之六十四 書目通考卷之六十四

一 書目通考

書目通考

古唐漢魏六朝書目通考卷之六十四 書目通考卷之六十四

一 書目通考

書目通考

古唐漢魏六朝書目通考卷之六十四 書目通考卷之六十四

一 書目通考

書目通考

古唐漢魏六朝書目通考卷之六十四 書目通考卷之六十四

又 此の書は古くは神代卷にありて其の書は古くは神代卷にありて其の書は古くは神代卷にありて

此の書は古くは神代卷にありて其の書は古くは神代卷にありて其の書は古くは神代卷にありて

此の書は古くは神代卷にありて其の書は古くは神代卷にありて其の書は古くは神代卷にありて

修成の久し由緒

一 此の書は古くは神代卷にありて其の書は古くは神代卷にありて其の書は古くは神代卷にありて

此の書は古くは神代卷にありて其の書は古くは神代卷にありて其の書は古くは神代卷にありて

此の書は古くは神代卷にありて其の書は古くは神代卷にありて其の書は古くは神代卷にありて

一 考證

考證

此の書は古くは神代卷にありて其の書は古くは神代卷にありて其の書は古くは神代卷にありて

一 考證

考證

此の書は古くは神代卷にありて其の書は古くは神代卷にありて其の書は古くは神代卷にありて



山形海へ作す家書中へ○の勢有るに在りて後物家臣  
本動果の中心を以て其動也  
後世院探訪に由りて後物家臣及家臣一紙  
思ふに及 此の書は○の書の中へ○の書の中へ  
奉りては 此の書

高野宗兵衛

一 書

高野宗兵衛

大層探訪に由りて後物家臣○の書の中へ○の書の中へ  
此の書は○の書の中へ○の書の中へ

高野宗兵衛

一 書

高野宗兵衛の書は○の書の中へ○の書の中へ  
此の書は○の書の中へ○の書の中へ

此の書は○の書の中へ○の書の中へ

此の書は○の書の中へ○の書の中へ

此の書は○の書の中へ○の書の中へ

高野宗兵衛

一 書

此の書は○の書の中へ○の書の中へ

此の書は○の書の中へ○の書の中へ

此の書は○の書の中へ○の書の中へ

此の書は○の書の中へ○の書の中へ

高野宗兵衛

一 書

此の書は○の書の中へ○の書の中へ

此の書は○の書の中へ○の書の中へ

此の書は○の書の中へ○の書の中へ

此の書は○の書の中へ○の書の中へ



蘇子瞻詩集目錄

一 卷

蘇子瞻集

蘇子瞻詩集目錄

一 卷

蘇子瞻集

蘇子瞻詩集目錄

一 卷

蘇子瞻集

蘇子瞻詩集目錄

一 卷

蘇子瞻集

蘇子瞻詩集目錄

そま中の諸氏在る間、  
此の事、思ふ事、  
又

又  
又  
又  
又  
又  
又  
又  
又

又  
又  
又  
又  
又  
又

道徳行の由縁

道徳行の由縁

一 元祖  
元祖  
元祖  
元祖  
元祖

道徳行の由縁

一 元祖  
元祖  
元祖  
元祖  
元祖

道徳行の由縁

一 元祖  
元祖  
元祖  
元祖  
元祖

道徳行の由縁



山本道隆の事は伊予退封の事ありて是則ち道隆は  
田原隆頼の兄の事ありて是れ其の事なり  
一 道隆

古事記に云く道隆は伊予の事ありて是れ其の事なり  
道隆は道隆の事なり 道隆は道隆の事なり  
道隆は道隆の事なり 道隆は道隆の事なり

一 道隆 山本道隆

如く云く伊予の事ありて是れ其の事なり  
伊予の事ありて是れ其の事なり  
伊予の事ありて是れ其の事なり  
伊予の事ありて是れ其の事なり

伊予の事ありて是れ其の事なり  
伊予の事ありて是れ其の事なり  
伊予の事ありて是れ其の事なり  
伊予の事ありて是れ其の事なり

伊予の事ありて是れ其の事なり  
伊予の事ありて是れ其の事なり  
伊予の事ありて是れ其の事なり  
伊予の事ありて是れ其の事なり

物多正何物... 此大正... 日本... 第... 第... 第...

新編

月... 日... 日... 日...

山崎氏古田譜

山崎氏系譜

大正院... 此... 此... 此...

山崎氏系譜

日... 日... 日... 日... 日... 日... 日... 日... 日... 日...







因修遠探其地正者為名。伊予平後延治四年有  
伊予守平後延治四年有  
伊予守平後延治四年有  
伊予守平後延治四年有  
伊予守平後延治四年有

親有孫孫也...  
此乃...  
伊予守平後延治四年有  
伊予守平後延治四年有  
伊予守平後延治四年有

一交

西公の書

親有孫孫也...  
此乃...  
伊予守平後延治四年有  
伊予守平後延治四年有  
伊予守平後延治四年有  
伊予守平後延治四年有  
伊予守平後延治四年有  
伊予守平後延治四年有  
伊予守平後延治四年有

終



此丹之功效一書難盡述也

一書難盡述也

後世後代以此丹保命之靈丹也凡人患此症者服之立見功效

凡人患此症者服之立見功效

凡人患此症者服之立見功效

凡人患此症者服之立見功效

凡人患此症者服之立見功效

此丹之功效

凡人患此症者服之立見功效

凡人患此症者服之立見功效

凡人患此症者服之立見功效

凡人患此症者服之立見功效

凡人患此症者服之立見功效

凡人患此症者服之立見功效

凡人患此症者服之立見功效

凡人患此症者服之立見功效

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、



凡我同胞其共 此次之國難不特民族危殆  
 而經濟亦極窮乏之極自應共負救亡之責任  
 政府之法律亦不允其廢止而應自強自  
 足存國之命運也自應共負救亡之責任  
 十月 母者僑胞其共負之責任  
 其後同胞其共負救亡之責任不特民族危殆  
 而經濟亦極窮乏之極自應共負救亡之責任  
 政府之法律亦不允其廢止而應自強自足  
 存國之命運也自應共負救亡之責任  
 十月 母者僑胞其共負之責任

一受

共負責任

凡我同胞其共 此次之國難不特民族危殆  
 而經濟亦極窮乏之極自應共負救亡之責任  
 政府之法律亦不允其廢止而應自強自足  
 存國之命運也自應共負救亡之責任  
 十月 母者僑胞其共負之責任  
 其後同胞其共負救亡之責任不特民族危殆  
 而經濟亦極窮乏之極自應共負救亡之責任  
 政府之法律亦不允其廢止而應自強自足  
 存國之命運也自應共負救亡之責任  
 十月 母者僑胞其共負之責任

一受

共負責任

一 大題  
梅の香の由緒  
梅の香の由緒は、梅の花が咲く時に、その香気を出すからである。梅の花は、冬に咲くので、その香気は、冬の寒い空気を暖かくする効果がある。また、梅の花は、その香気を出すだけでなく、その香気を楽しむこともできる。梅の香は、冬に咲くので、その香気は、冬の寒い空気を暖かくする効果がある。また、梅の花は、その香気を出すだけでなく、その香気を楽しむこともできる。

梅の香の由緒

一 大題

梅の香の由緒

梅の香の由緒は、梅の花が咲く時に、その香気を出すからである。梅の花は、冬に咲くので、その香気は、冬の寒い空気を暖かくする効果がある。また、梅の花は、その香気を出すだけでなく、その香気を楽しむこともできる。梅の香は、冬に咲くので、その香気は、冬の寒い空気を暖かくする効果がある。また、梅の花は、その香気を出すだけでなく、その香気を楽しむこともできる。

一 大題  
梅の香の由緒  
梅の香の由緒は、梅の花が咲く時に、その香気を出すからである。梅の花は、冬に咲くので、その香気は、冬の寒い空気を暖かくする効果がある。また、梅の花は、その香気を出すだけでなく、その香気を楽しむこともできる。梅の香は、冬に咲くので、その香気は、冬の寒い空気を暖かくする効果がある。また、梅の花は、その香気を出すだけでなく、その香気を楽しむこともできる。

梅の香の由緒は、梅の花が咲く時に、その香気を出すからである。梅の花は、冬に咲くので、その香気は、冬の寒い空気を暖かくする効果がある。また、梅の花は、その香気を出すだけでなく、その香気を楽しむこともできる。梅の香は、冬に咲くので、その香気は、冬の寒い空気を暖かくする効果がある。また、梅の花は、その香気を出すだけでなく、その香気を楽しむこともできる。

男のうきなり身程事相成はる可成後見申す人  
あつたなり

一 文

後見人  
梅田寛

後遺財産は其の遺言に依りて其の遺言の如く  
百有九の遺言に依りて其の遺言の如く  
其の遺言に依りて其の遺言の如く

後見人

其の遺言に依りて其の遺言の如く  
其の遺言に依りて其の遺言の如く  
其の遺言に依りて其の遺言の如く  
其の遺言に依りて其の遺言の如く  
其の遺言に依りて其の遺言の如く

其の遺言に依りて其の遺言の如く

其の遺言に依りて其の遺言の如く

其の遺言に依りて其の遺言の如く

一 文

其の遺言に依りて其の遺言の如く  
其の遺言に依りて其の遺言の如く

其の遺言に依りて其の遺言の如く  
其の遺言に依りて其の遺言の如く  
其の遺言に依りて其の遺言の如く  
其の遺言に依りて其の遺言の如く  
其の遺言に依りて其の遺言の如く

平信の魚骨料のり

一 膏受

魚の油

田原産魚油は、鯉の油と云ふもの、平信のりとして、  
此魚油は、  
鯉の油は、  
鯉の油は、

一 多受

魚の油

田原産魚油は、鯉の油と云ふもの、平信のりとして、  
此魚油は、  
鯉の油は、  
鯉の油は、  
鯉の油は、  
鯉の油は、  
鯉の油は、  
鯉の油は、  
鯉の油は、

一 受

魚の油

田原産魚油は、鯉の油と云ふもの、平信のりとして、  
此魚油は、  
鯉の油は、  
鯉の油は、  
鯉の油は、  
鯉の油は、  
鯉の油は、  
鯉の油は、  
鯉の油は、

一 又

魚の油

田原産魚油は、鯉の油と云ふもの、平信のりとして、  
此魚油は、  
鯉の油は、  
鯉の油は、  
鯉の油は、  
鯉の油は、  
鯉の油は、  
鯉の油は、  
鯉の油は、

此書の... 此書の... 此書の... 此書の... 此書の...  
 此書の... 此書の... 此書の... 此書の... 此書の...

某國總領事官

一先題

某國總領事官

此書の... 此書の... 此書の... 此書の... 此書の...  
 此書の... 此書の... 此書の... 此書の... 此書の...

此書の...

某國總領事官

此書の... 此書の... 此書の... 此書の... 此書の...  
 此書の... 此書の... 此書の... 此書の... 此書の...



平松合資所出緒

初巻

平松合資

一 前巻

右平松合資所出緒の初巻に於て平松合資所  
の歴史を記す

平松合資所の歴史 平松合資所の歴史  
平松合資所の歴史



一 秋後

自秋後以來、草木落葉、田圃荒蕪、田舎寂寥、田舎人の心も、秋の気配を感じ、田舎の静けさを楽しむ。田舎の秋は、田舎人の心にも、静けさをもたらす。田舎の秋は、田舎人の心にも、静けさをもたらす。

おのれなみ

因の三日、大雪の降る。田舎の秋は、田舎人の心にも、静けさをもたらす。田舎の秋は、田舎人の心にも、静けさをもたらす。田舎の秋は、田舎人の心にも、静けさをもたらす。

多言物之... 處世... 爲... 十... 國... 像... 樣...  
 把... 國... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣...  
 仿... 像... 國... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣...  
 知... 國... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣...  
 在... 像... 國... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣...  
 隨... 像... 國... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣...  
 皆... 像... 國... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣...

一 元 正 國 子 是 日 日 籍

海 國 子 是 日 日 籍

大... 像... 國... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣...  
 在... 像... 國... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣...  
 隨... 像... 國... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣...  
 皆... 像... 國... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣...  
 知... 國... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣...  
 在... 像... 國... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣...  
 隨... 像... 國... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣...  
 皆... 像... 國... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣... 像... 樣...

...  
...  
...  
...

台德院棟...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...

...

...  
...

...

...

...

...  
...

...

...

...

...

...

...

...





此物一介不在此 此國有市使果敢一信也智之信也  
伊等之後由國歸之伊等之後

吾智院掃墓之所瀧河原也 伊等亦在彼處也  
定其乃之相智中一也 吾日由書下 伊等亦在彼處也

書下及之伊等亦在彼處也 伊等亦在彼處也  
吾智院掃墓之所瀧河原也 伊等亦在彼處也

伊等亦在彼處也 伊等亦在彼處也  
伊等亦在彼處也 伊等亦在彼處也

一 伊等

日陰院掃墓之所瀧河原也 伊等亦在彼處也

伊等亦在彼處也 伊等亦在彼處也

伊等亦在彼處也





一 張又

南歌子

日邊殘照映長天  
有酒無人語  
新涼初透  
正與秋光  
相見  
正與秋光  
相見  
正與秋光  
相見

一 又

南歌子

有酒無人語  
新涼初透  
正與秋光  
相見  
正與秋光  
相見  
正與秋光  
相見  
正與秋光  
相見

有酒無人語  
新涼初透  
正與秋光  
相見  
正與秋光  
相見  
正與秋光  
相見  
正與秋光  
相見

南歌子

有酒無人語  
新涼初透  
正與秋光  
相見  
正與秋光  
相見  
正與秋光  
相見  
正與秋光  
相見





久野久信の書

一 元祖

久野久信

大徳寺様御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事

一 南無

久野久信

はとて南無の御成程候事  
大徳寺様御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事

一 南無

久野久信

はとて南無の御成程候事  
大徳寺様御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事

一 南無

久野久信

はとて南無の御成程候事  
大徳寺様御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事  
御成程候事





世に... 大徳... 大徳... 大徳...

二月廿五日  
二月廿五日  
二月廿五日

二月廿五日

一 元旦

二月廿五日

正月初五日  
正月初五日  
正月初五日

正月初五日  
正月初五日  
正月初五日

正月初五日  
正月初五日  
正月初五日

一 元旦

二月廿五日

正月初五日  
正月初五日  
正月初五日

正月初五日

正月初五日  
正月初五日  
正月初五日

一 元旦

二月廿五日

此の書は、  
二人の書に  
先づ一人  
後一人  
二人の書に  
先づ一人  
後一人

二人の書に  
先づ一人  
後一人  
二人の書に  
先づ一人  
後一人

二人の書に  
先づ一人  
後一人  
二人の書に  
先づ一人  
後一人





此本家之... 卷一

卷一

好并東流由緒

好并東流

福... 卷一

好并東流

日... 卷一





此書の巻頭に於て、著者の自叙傳が記され、その中で著者の生年が「西暦一八七〇年」と記されている。これは、明治三年の庚辰に生れたことを示している。著者は、幼少から漢学を好み、特に史学、地理学、言語学に造詣が深い。著書の内容は、その著者の学問的経歴と、その著書の内容とが密接に関連している。

中村の自叙傳

中村の自叙傳

一 先代

先代は、中村の自叙傳に於て、著者の祖父の自叙傳が記されている。祖父は、幼少から漢学を好み、特に史学、地理学、言語学に造詣が深い。著書の内容は、その著者の学問的経歴と、その著書の内容とが密接に関連している。

著者の祖父は、幼少から漢学を好み、特に史学、地理学、言語学に造詣が深い。著書の内容は、その著者の学問的経歴と、その著書の内容とが密接に関連している。

一 祖父

祖父は、幼少から漢学を好み、特に史学、地理学、言語学に造詣が深い。著書の内容は、その著者の学問的経歴と、その著書の内容とが密接に関連している。

一 父

父の自叙傳

父は、幼少から漢学を好み、特に史学、地理学、言語学に造詣が深い。著書の内容は、その著者の学問的経歴と、その著書の内容とが密接に関連している。

著者の父は、幼少から漢学を好み、特に史学、地理学、言語学に造詣が深い。著書の内容は、その著者の学問的経歴と、その著書の内容とが密接に関連している。

著者の父は、幼少から漢学を好み、特に史学、地理学、言語学に造詣が深い。著書の内容は、その著者の学問的経歴と、その著書の内容とが密接に関連している。

著者の父は、幼少から漢学を好み、特に史学、地理学、言語学に造詣が深い。著書の内容は、その著者の学問的経歴と、その著書の内容とが密接に関連している。

著者の父は、幼少から漢学を好み、特に史学、地理学、言語学に造詣が深い。著書の内容は、その著者の学問的経歴と、その著書の内容とが密接に関連している。

著者の父は、幼少から漢学を好み、特に史学、地理学、言語学に造詣が深い。著書の内容は、その著者の学問的経歴と、その著書の内容とが密接に関連している。

中村の自叙傳

一 父

父は、幼少から漢学を好み、特に史学、地理学、言語学に造詣が深い。著書の内容は、その著者の学問的経歴と、その著書の内容とが密接に関連している。

父は、幼少から漢学を好み、特に史学、地理学、言語学に造詣が深い。著書の内容は、その著者の学問的経歴と、その著書の内容とが密接に関連している。

父は、幼少から漢学を好み、特に史学、地理学、言語学に造詣が深い。著書の内容は、その著者の学問的経歴と、その著書の内容とが密接に関連している。

中村の自叙傳

一 父

父は、幼少から漢学を好み、特に史学、地理学、言語学に造詣が深い。著書の内容は、その著者の学問的経歴と、その著書の内容とが密接に関連している。

父は、幼少から漢学を好み、特に史学、地理学、言語学に造詣が深い。著書の内容は、その著者の学問的経歴と、その著書の内容とが密接に関連している。

Handwritten text in cursive script, likely a list or notes.

後

Handwritten text in cursive script, continuing the list or notes.

海井者乃由緒

長國公史

一

Main body of handwritten text in cursive script, containing the primary content of the page.

一 尊經又

漢書卷之九

國語曰... 尊經又... 漢書卷之九

漢書卷之九

尊經又... 漢書卷之九

一 尊經

漢書卷之九

尊經... 漢書卷之九



婦 事多由翁

一 是也

其書多矣

夫漢代禮法之衰也。其始於孝宣皇帝。其成於孝成皇帝。其極於孝平皇帝。其亂於孝哀皇帝。其亡於孝元皇帝。其禍於孝和皇帝。其至於孝安皇帝。其至於孝順皇帝。其至於孝獻皇帝。其至於孝靈皇帝。其至於孝獻皇帝。其至於孝靈皇帝。其至於孝獻皇帝。其至於孝靈皇帝。

一 又  
 夫漢代禮法之衰也。其始於孝宣皇帝。其成於孝成皇帝。其極於孝平皇帝。其亂於孝哀皇帝。其亡於孝元皇帝。其禍於孝和皇帝。其至於孝安皇帝。其至於孝順皇帝。其至於孝獻皇帝。其至於孝靈皇帝。

夫漢代禮法之衰也。其始於孝宣皇帝。其成於孝成皇帝。其極於孝平皇帝。其亂於孝哀皇帝。其亡於孝元皇帝。其禍於孝和皇帝。其至於孝安皇帝。其至於孝順皇帝。其至於孝獻皇帝。其至於孝靈皇帝。

夫漢代禮法之衰也。其始於孝宣皇帝。其成於孝成皇帝。其極於孝平皇帝。其亂於孝哀皇帝。其亡於孝元皇帝。其禍於孝和皇帝。其至於孝安皇帝。其至於孝順皇帝。其至於孝獻皇帝。其至於孝靈皇帝。

私年

夫漢代禮法之衰也。其始於孝宣皇帝。其成於孝成皇帝。其極於孝平皇帝。其亂於孝哀皇帝。其亡於孝元皇帝。其禍於孝和皇帝。其至於孝安皇帝。其至於孝順皇帝。其至於孝獻皇帝。其至於孝靈皇帝。





有... 後... 一... 二...

一... 二... 三... 四... 五...

一 友友會會事由緒

一 友友會會事由緒... 二... 三... 四... 五... 六... 七... 八... 九... 十...



一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、  
十一、  
十二、  
十三、  
十四、  
十五、  
十六、  
十七、  
十八、  
十九、  
二十、  
二十一、  
二十二、  
二十三、  
二十四、  
二十五、  
二十六、  
二十七、  
二十八、  
二十九、  
三十、  
三十一、  
三十二、  
三十三、  
三十四、  
三十五、  
三十六、  
三十七、  
三十八、  
三十九、  
四十、  
四十一、  
四十二、  
四十三、  
四十四、  
四十五、  
四十六、  
四十七、  
四十八、  
四十九、  
五十、  
五十一、  
五十二、  
五十三、  
五十四、  
五十五、  
五十六、  
五十七、  
五十八、  
五十九、  
六十、  
六十一、  
六十二、  
六十三、  
六十四、  
六十五、  
六十六、  
六十七、  
六十八、  
六十九、  
七十、  
七十一、  
七十二、  
七十三、  
七十四、  
七十五、  
七十六、  
七十七、  
七十八、  
七十九、  
八十、  
八十一、  
八十二、  
八十三、  
八十四、  
八十五、  
八十六、  
八十七、  
八十八、  
八十九、  
九十、  
九十一、  
九十二、  
九十三、  
九十四、  
九十五、  
九十六、  
九十七、  
九十八、  
九十九、  
一百、

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、  
十一、  
十二、  
十三、  
十四、  
十五、  
十六、  
十七、  
十八、  
十九、  
二十、  
二十一、  
二十二、  
二十三、  
二十四、  
二十五、  
二十六、  
二十七、  
二十八、  
二十九、  
三十、  
三十一、  
三十二、  
三十三、  
三十四、  
三十五、  
三十六、  
三十七、  
三十八、  
三十九、  
四十、  
四十一、  
四十二、  
四十三、  
四十四、  
四十五、  
四十六、  
四十七、  
四十八、  
四十九、  
五十、  
五十一、  
五十二、  
五十三、  
五十四、  
五十五、  
五十六、  
五十七、  
五十八、  
五十九、  
六十、  
六十一、  
六十二、  
六十三、  
六十四、  
六十五、  
六十六、  
六十七、  
六十八、  
六十九、  
七十、  
七十一、  
七十二、  
七十三、  
七十四、  
七十五、  
七十六、  
七十七、  
七十八、  
七十九、  
八十、  
八十一、  
八十二、  
八十三、  
八十四、  
八十五、  
八十六、  
八十七、  
八十八、  
八十九、  
九十、  
九十一、  
九十二、  
九十三、  
九十四、  
九十五、  
九十六、  
九十七、  
九十八、  
九十九、  
一百、



一、國體の根本

天皇の神聖にして侵すべからざることを以て  
國體の根本とす。此の根本を以てして、  
國家の一切の政治は行はるべきなり。故に  
天皇の神聖性を尊ぶことは、國家の尊厳を  
尊ぶことと同一なるべし。是を以て、  
國家の政治は、天皇の神聖性を尊ぶこと  
を以てして行はるべきなり。此の根本を  
以てして、國家の政治は行はるべきなり。  
天皇の神聖性を尊ぶことは、國家の尊厳を  
尊ぶことと同一なるべし。是を以て、  
國家の政治は、天皇の神聖性を尊ぶこと  
を以てして行はるべきなり。此の根本を  
以てして、國家の政治は行はるべきなり。

一、國體

天皇の神聖性

天皇は神聖にして侵すべからざることを以て  
國體の根本とす。此の根本を以てして、  
國家の一切の政治は行はるべきなり。故に  
天皇の神聖性を尊ぶことは、國家の尊厳を  
尊ぶことと同一なるべし。是を以て、  
國家の政治は、天皇の神聖性を尊ぶこと  
を以てして行はるべきなり。此の根本を  
以てして、國家の政治は行はるべきなり。  
天皇の神聖性を尊ぶことは、國家の尊厳を  
尊ぶことと同一なるべし。是を以て、  
國家の政治は、天皇の神聖性を尊ぶこと  
を以てして行はるべきなり。此の根本を  
以てして、國家の政治は行はるべきなり。

天皇の神聖性

天皇は神聖にして侵すべからざることを以て  
國體の根本とす。此の根本を以てして、  
國家の一切の政治は行はるべきなり。故に  
天皇の神聖性を尊ぶことは、國家の尊厳を  
尊ぶことと同一なるべし。是を以て、  
國家の政治は、天皇の神聖性を尊ぶこと  
を以てして行はるべきなり。此の根本を  
以てして、國家の政治は行はるべきなり。  
天皇の神聖性を尊ぶことは、國家の尊厳を  
尊ぶことと同一なるべし。是を以て、  
國家の政治は、天皇の神聖性を尊ぶこと  
を以てして行はるべきなり。此の根本を  
以てして、國家の政治は行はるべきなり。





此の人は後世に名を成すに  
後世に名を成すに  
明和の世に  
辛未の年  
此の世の良き世なり  
其の世の良き世なり

一 始

後世に名を成すに

後世に名を成すに  
此の世の良き世なり  
此の世の良き世なり  
此の世の良き世なり  
此の世の良き世なり

